Poster (Subdiscipline) | 専門領域別 | 体育科教育学

体育科教育学　ポスター発表

Fri. Sep 2, 2022 11:30 AM - 1:00 PM 第一体育館バレーボール2 (第一体育館バレーボール)

[11教-ポ-05]体力の二極化を配慮した小学校体育サッカーにおけるゲーム中の身体活動量

ボールの相違による影響

*Ryosuke Tsuda[1] (1. Kanazawa Medical University)

本研究では、小学校体育サッカーにおけるゲーム中の活動量を、ボールの相違と関連付けて検討することを目的とした。そのために、石川県下の A小学校5年生1クラス24名（男子12人、女子12人）を対象にして、ゴムボール（ molten社製、 B614J）を用いたゲームとスポンジボール（ molten社製、 STS21）を用いたゲームをそれぞれゲーム行わせた。いずれもコートの広さ・人数、ゲーム時間は次の通りとした。（縦20m×横10m・3対3、ゲーム時間3分）。 活動量計（ Omron社製、 HJA-750C）を用いてゲーム中の各運動強度ごとの活動時間（低強度：0～2.9METs、中強度：3.0～5.9METs、高強度：6.0～ METｓ）を測定した。また、ゲーム終了後に技術・戦術面、体力面、心理面から構成される質問紙調査を実施した（5件法）。 主な結果は次のとおりである。① ゲーム中の各運動強度ごとの活動時間をみると、ゴムボールを用いたゲームとスポンジボールを用いたゲームとの間に有意差は認められなかった（低強度　ゴム：10.8±20.4秒、スポンジ：17.5±30.0秒、中強度　ゴム：133.8±26.2秒、スポンジ：130.8±28.7秒、高強度　ゴム：35.4±25.7秒、スポンジ：31.7±26.5秒）。 ② ゲーム終了後の質問紙調査をみると、心理面の関心の項目12・13・14「関心」「意欲」「態度」において肯定的に回答した（あてはまる・よくあてはまる）児童の割合は、いずれも9割を超えた。 以上の結果は、両ゲームともに活動量は変わらず、かつ楽しくゲームを行うことができることを示唆するものである。

©Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences